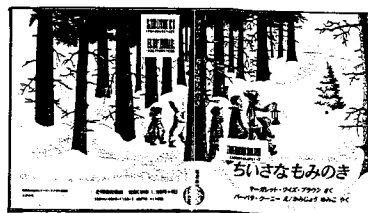


子どもたちといっしょに

「ちいさなもみのき」



マーガレット・ワイズ・ブラウン さく
バーバラ・フーニー え
かみじょう ゆみこ やく

もりのはずれにあるちいさなもみのき。
七回目の冬がきた頃、ひとりの男の人が
やってきて、地面を掘り、木に語りかけま

す。「おまえはこれから、すばらしいおいおいにいくんだよ。……ここまで
やってこれられない、わたしのむすこと いっしょに、おおきくなっておくれ。あの
こが げんきになるように、ちからになっておくれ。」それから毎年冬になると、
ちいさなもみのきはおとこのこの家に行き、クリスマスツリーとしてかざら
れます。しかし、それから何年か過ぎた冬、もみのきはいつものように男の人
がくるのをたのしみに待っていましたが、あらわれませんでした。けれども、ゆき
のよるに、とおくからクリスマスキャロルがきこえてきて、誰かが近づいてきまし
た。あの足のわるかったおとこのこがじぶんのきのところまであるいてきたの
です。

あまり多くの色は使っていませんが、淡い色彩がすてきです。幸せなクリ
スマスの物語で、この季節にぴったりです。



第50回読書会

「グリーン・ノウのお客さま」

L.M. ポストン 作
亀井 俊介 訳

日時：12月19日(日) 午後1:30～3:30

場所：創作活動室1

シリーズ4作目。

今回は、難民の中国少年ピンとゴ
ラのハンノーとの友情物語。

12月の行事

ブックバス

1 (水)	ブックバス出発式 11:00～ 絵本のじかん 3:00～	新飯田 12:35～13:20 栗原根 13:30～14:30	12 (日)	おはなし講習会 ③	
2 (木)		白井中 12:55～13:35 左瀬地 14:00～14:40 左瀬小 15:00～15:45	15 (水)	第21回 あかちゃんのはじめてであうほし 絵本のじかん 3:00～	
3 (金)		白井中 12:55～13:35 白井小 14:00～15:15	18 (土)	クリスマス おはなし大会 1:30～	
4 (土)	おはなし会 3:00～		19 (日)	第50回 読書会 1:30～	
5 (日)	おはなし講習会 ②		22 (水)	絵本のじかん 3:00～	
8 (水)	絵本のじかん 3:00～		25 (土)	おはなしがご例会 10:00～ おはなし会 3:00～	
11 (土)	おはなしがご例会 10:00～ おはなし会 3:00～		29 (水)	年末年始の休館 12/29(水)～1/4(水)	

しろね図書館だより

No. 55

発行 白根市立図書館

平成16年12月1日



以前は僕の友達はいたいみんなその鈴の音を聞くことができた。でも年月
が経ってしまって、もうその音は誰の耳にも届かない。サラはある年のクリ
スマスにそれを振ってみたが、彼女にさえその美しい音は聞こえなかった。僕は
もうすっかり大人になってしまったけれど、鈴の音はまだ聞こえる。本当に信
じていれば、それはちゃんと聞こえるんだよ。

これは、「急行『北極号』」という絵本の最後の頁です。そして、実はフリ
スマスの絵本なのです。子ども時代は、おとなには見えなくなってしまったも
のが、たくさん見えて、それは、心の中の豊かさや、幸せ感を象徴しているもの
なのです。

子どもをとりまく社会が、どんどん不安になってきている昨今ですが、おとな
である私たちは、一人ひとりが、もう一度、「ほんとうの幸い」が、何であるかを
問い直す時がきているのではないのでしょうか。

絵本といえども、すごく深い内容です。一度お読み下さい。

11月の

来館者 ----- 15,390人 (見学・視察
170人含)
貸出冊数 ---- 4,174冊
予約件数 ---- 168件

ブックバス利用者 ---- 499人

ブックバス貸出冊数 ---- 1,584冊

リクエスト情報 (しばらくお待ち下さい)

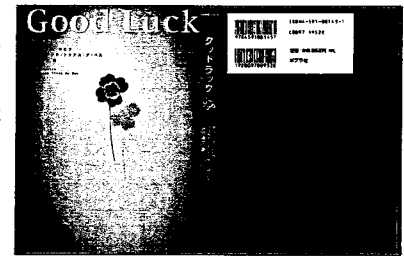
- 1位・世界の中心で、愛をさけぶ (20名)
- 2位・ハリ・ポッターと
不死鳥の騎士団 (9名)
- 3位・冬のソナタ 上・下 (4名)
- 4位・蛇にピアス (3名)
- 幻覚 (3名)
- キッパリ! (3名)

他

平成十六年十一月二十一日（日）
午後一時半～三時半 参加者九名

◆参加者の感想から

ティーンズ 933 ロ (ポプラ社)
アレックス・ロビラ / 作
ルナンド・ドリラス・デ・ベス / 作
田内志文 / 訳



64歳になる初老の男、この本の主人公マックスはセントラルパークのベンチに腰をかけていた。そのときマックスのとなりひとりの男が腰を下ろした。その男はジムという主人公の、少年時代の親友であった。お互いにニューヨークのブルックスに住み、家族ぐるみの付き合いをしていたが、ジムたちが黙って引っ越してしまいすっかり音信が途絶えていた。それが54年ぶりの運命の再会であったが、ジムは、仕事も、財産も、すべてを失い変わり果てていた。そこで、マックスは、祖父から聞かされた「魅惑の森」の物語をする。物語は、幸運をもたらす魔法のクローバーを探しに行く2人の騎士の話で、だだっぴろい森の中からクローバーを探し当てるために2人は別々に行動をするのだが、黒い騎士ノットと白い騎士シンドの行動が後々の2人の運命を分けることになる。

作者は、この物語で、「運と幸運の違い」を伝えたかったのではないかと、一度何かの成功体験を踏んでいる人は、この本の内容に「そうそう」と納得でき、その成功体験の時の気持ちを思い出して、また明日から気持ちを入れ替えてガンパロウ、という気持ちにさせてくれる本である。

話の途中に、栞りみたいなモノが入っていて、簡単な名言集的なメッセージが書かれている。

運は、呼びこむことも引き留めることもできない。
幸運は、自らの手で作り出せば、永遠に尽きることはない。

幸運が訪れないからには、訪れないだけの理由。
幸運をつかむためには、自ら下ごしらえをする必要がある。

この本を読んでいただければ表紙の由来、四つ葉のクローバーが理解できるかと。

(星 島 等)



『ノウの川』
L・M・ボストン
亀井俊介 訳作

評論社

今回の読書会は、「グリーン・ノウ物語」の三番目の作品で、「グリーン・ノウの川」です。

グリーン・ノウの屋敷の持ち主のオールドノウ夫人は、長い旅にでたため、ビルド博士とシビラ夫人の二人にこの家を貸しました。二人は、グリーン・ノウが、大きな家で、グリム童話に出てくる家のように子どもの夢をさそう場所にあるの、親戚の娘のアイダと、オスカとピロという二人の難民の少年を、夏休みのあいだじゅう招待しました。この小説は、この三人の少女が、グリーン・ノウのそばを流れる川で、さまざまの冒険をするさまを、大きな夢と真実味を含ませながら語られているものです。

子どもたちが、川を下って行くときの自然の様子が、ステキに描かれていて、いっしょに経験できた。冒険のなかで、子どもたちが見たものの存在は、大きい。

このグリーン・ノウの川は、言葉がグツと胸に入ってくる。ボストン夫人が、六十七才のときに書いたのにもかかわらず、こどもの感性をたいへんよく理解している。

世すて人は、たとえ世を捨てても、しつかり生きている。生きているときは、苦ししいけれど、いつか光輝く時もあるだろう。そんな希望が感じられる。

子どもの視点、赤ん坊の目で描かれている。私自身我に帰り、客観的に読むことができた。

案^{あん}しく読むことができた。自然のなかに生き物や、細かいところの描写がよく書ける。大人でもあこがれる世界で、子どもたちからこんな体験をしているの、いいのだらう。

「オスカーの最後の言葉から引用した。オスカーは、もったいぶって言うた。『おとなってものは、しよってゆうそうなんだ。いまあるものはきらないんだ。ほんとうに興味がいのものがあるとしやたら、それは、むかしいものでなくとしやらないんだよ。』」

ちよつと時間を見つけた、グリーン・ノウ川の冒険に行つてみました。思いがけないステキな出会いがあるかもしれせんよ。

さて、次回の読書会は

一二月一九日(日)午後一時半〜三時半
 『グリーン・ノウのお客さま』
 L・M・ボストン作
 どなたでも参加できます。ぜひおいでください。

(小湊 美和子)

大人は、なにも見ていないのではない
か。反省させられる。